

5 / 12 『主の祈りを祈ろう』(マタイ6:9~13)

長谷川 望牧師

- * 「主の祈り」はマタイの福音書の6章に山上の説教の一部として、また、ルカの福音書の11章では「祈りを教えてください」という弟子たちの願いの答えとして、主イエスが語られたものである。「主の祈り」は祈りの真髄であり、この祈りの中には祈りのすべての要素が含まれているとあってよい。私たちが何をどう祈ってよいかわからないときは、心を静めて「主の祈り」を祈ればよい。翻訳が変わったところを取り上げる。
- * 「御名が聖なるものとされますように」(マタイ6:9) 第三版は「御名があがめられますように」であった。日本語の崇めるは「尊いものとして扱う、誉めたたえる」という意味であるが、原語の意味は元々「聖なるものとする」という意味であり、「聖」という概念は、他のものと区別するということである。神は、被造物や諸々の神々とは区別されるべき方であり、また、全く罪のない方である。そのことを表す「聖」を祈りのことばに盛り込んだほうがよいということでこの訳になった。「聖なるものとしてあがめる」といえば、正確かもしれない。
- * 「私たちの負い目をお赦してください。私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します。」。(6:12) 「赦します」は第3版では「赦しました」であった。このギリシャ語原語は、大抵の場合いわゆる確定した過去の時を表すが、最近の研究では、多元的な意味が認められることが分かっている。「赦します」は、今赦したという完了の意味と、これからも赦すという意味未来の意味を含めた日本語訳になった。ここで大切なのは、私たちが人を赦した報いとして神に赦されるということではない。私たちはすでに主の十字架によって赦されている。その恵みを思うとき、当然、人を赦さねばならないと思う。神に赦されているから人を赦せるのである。
- * 「国と力と栄はとこしえにあなたのものだからです。アーメン」は本文から消えていて、脚注に「後代の写本にこれを加えるものもある」とある。当教会では、教会の伝統を重んじてこれを主の祈りの最後に付け加えて用いる。